

有限会社 メニサイド

エコな紙布をたくさんの人に 知ってもらうための技術の絆

年間約1,000点の鞆のサンプルづくりを中心としていたが現在は生産にまで幅を広げ、産業機能商品などさまざまなジャンルの製品づくりを行う。伊勢志摩サミットにおける各国要人に向けた土産袋の製作にも携わった。熱い想いを持って、紙布(しふ)を世の中に広げる活動も行い自然環境に優しく、人に優しい製品の普及に努めている。

主な権利

2016年：商標登録 第5839903号
2016年：商標登録 第5839904号

会社概要

所在地：東京都足立区南花畑4-27-8 第23アライビル1F
電話：03-5851-3262
URL：http://www.sifudachiya.com
業種：鞆、袋物、ケースなどの製造・販売
設立：2001年(平成13年)
資本金：300万円



代表取締役：中里 貴子さん

紙布作家との出会いから 新たな製品づくりの旅へ

革の鞆、リュックサック、袋物、ケースなど、卓越した技術によって幅広い製品を生み出している有限会社メニサイド。サンプルの難しい型紙を製作する技術を持ち、小ロット、さらには大量生産まで、顧客のさまざまな要望に答えている。

そんな同社が、新しい素材と劇的に出会ったのは2014年、中里貴子社長が病気で療養していた時のこと。「私たちの会社で新しいブランドを立ち上げたいと考えていた頃でした。何か社会に発信できることを、エコという観点を大切にしながら見つけたいと思っていたのです」そして何気なく見ていたテレビ番組で、紙布作家の桜井貞子さんを知る。

紙布という素材は字の通り、紙を織って作られる布のこと。江戸時代には伊達藩から幕府への献上品でもあった。桜井さんは宮城県でも廃れつつあった紙布の製作技術を現代に復元させてきた。「和紙の糸を使った伝統工芸があることを知り、

これはお会いしなければと思いました」と、中里社長はすぐに行動に出る。桜井さんがいると思われる展示会に足を運んで対面。自分も紙布という素材を大切にしながら、人々に広める仕事がしたいと訴える。そんな中里社長の想いにふれた桜井さんは、紙布について丁寧に教え、それからの活動を応援してくれた。

紙布やテープや組紐は 強くて丈夫であることが特徴

そんな出会いから、新たな紙布によるモノづくりがスタートする。紙布にもいろいろあって、縦糸と横糸の両方に紙糸を使うのが諸紙布(もろじふ)。横糸に紙糸を使い、縦糸には他の素材を使った絹紙布、綿紙布、麻紙布がある。ウコン、ビワ、クルミ、柿渋、茜など、何で草木染めをするかによっても変わってくる。

そうしたもののから、鞆などを編む。しかしきつと多くの方は、紙で編んだものが強度を保てるのかと疑問に思われるだろう。ところが、この紙布は強くて丈夫

だ。同社では紙糸から、鞆の持ち手などに使える引っ張り強度300kgのテープや、紙袋や巾着袋の紐にも使える組紐も開発した。天然素材の和紙でできているテープというのは、世界初の試みである。

知的財産マッチング会で 新たな自動生産の道を拓く

ある日、中里社長は「ビジネスチャンス・ナビ2020」という受発注業務のマッチングサイトを見ながら、ピンと来る感覚を得たと言う。再び「ここに行けば何かがある」と感じたのだ。そして2017年3月に、知財センターが主催する「知的財産マッチング会」に参加。そこで東京都立産業技術総合研究センター(以下、産技研)と面談する。その後、紙糸を用いた組紐を機械で量産できないかと知財センターの製品化コーディネーターに相談。4月には一緒に産技研の多摩テクノプラザを訪れ、実際の自動組紐機を見学し、サンプルによって試してみることにした。その後、紙糸でも機械で自動生



足立区で紙布による製品づくりを行っている同社は、「Sifuあだちや」という名前でブランドを立ち上げ、日本とヨーロッパで商標登録している。



ウコン、ビワ、柿渋など、さまざまな草木染めが施された紙糸。

産できることを確認。組紐の商用化を実現できた。この技術によって、紙糸製の組紐をバッグの持ち手や縛り紐に用いた商品を開発した。組紐一つで、開発できるアイテムの幅がグンと広がるのだ。

物事にはタイミングがあって すぐに動くことが大切

2018年5月には、そうした技術も盛り込みながら、BEAMS JAPAN、松久永助紙店とのコラボによる8アイテムのトラベルシリーズを発表。2019年1月には、フランスの「メゾン・エ・オブジェ・パリ」に、紙糸の組紐を用いた商品を出展した。

改めて知財センターの製品化コーディネーターについて聞いてみたところ「すぐに一緒に動いてくれる人でした。物事にはすべてタイミングがあって、今この時に進めるべきことがあると思います。私は決断や行動が早すぎて、無謀と言われることもありますけどね」と語られた。

しかし決して無謀ではない。2014年からは自分で機械も始めている。「機械り

の勉強をすることで、日本各地の歴史や文化が見えてくるのも面白いんです」

多面的な取り組みを通じて 出会いやつながりを広げたい

今後も「エコ」という視点を大切に持ち続けたいと言う中里社長。「紙布で作ったバッグなどは洗濯できるので、長く使えます。使い捨てにならないことは、これからの時代、もっと大切になるでしょう。しかも軽いか、消臭・抗菌効果があるとか、燃やしても有毒ガスが出ないなどのメリットもたくさんある。そんな素材をもっと、いろいろな形で広めたいです」と熱く語られた。

メニサイドがめざすのは、社名の通りmany side…多面的な取り組みである。



横糸に美濃和紙、縦糸に綿を使用した、松久永助紙店とのコラボによる紙布帆布のポーチ。



BEAMS JAPAN、松久永助紙店とのコラボによる綿紙布のトートバッグ。まさに「紙技」として、普段使いにもギフトとしても喜ばれている。

一つの見方にとらわれず、あらゆる視点からのモノづくりを提案したい。そんな想いが、紙布や紙糸という新たな素材との出会いにつながった。

そして中里社長には、人を育てたいという想いがある。同社の仕事も内職のできる人に依頼するなど、主婦や高齢者など地元のネットワークを活かしながら、働く人の輪を作っている。さらには立川の障がい者施設の人たちに依頼できるように、紙布の葉を作る仕事も生み出した。行動があるから、出会いがある。だから、人と人がつながる。「きつと動くことによって、新しい使命が生まれるんです。目の前のことを一生懸命にすることが、自然な流れとして先々につながって行くような気がします」と微笑みながら前を向いた。

知財
センター
から

新商品開発の途中の工程に欠かせない技術を紹介

繊維に関するいろいろな機械やノウハウを保有している産技研との間に入る形で、技術のマッチングにおけるサポートを行いました。新たな素材との出会いによって、さらに新しい技術開発が必要になる。そうした局面でのお手伝いから始まり、日本やヨーロッパにおける商標などのご相談も受けています。担当：秋葉原 笹原製品化コーディネーター